



年 組 名前

道新で  
ワークシート

## ロボットコンバインが刈り取り

9月中旬、岩見沢市志文町の農場。エンジン音を響かせたコンバインが黄金色の稲穂を刈り取っていく。一見、普段の収穫風景だが、運転手は操作レバーに触れることなく座っているだけ。「熟練技術がなくてもきれいに刈ってくれる。疲れもない」。運転席から降りた就農30年以上のA

## 岩見沢

【岩見沢】ロボット技術や最先端の情報通信技術（ICT）を活用した「スマート農業」。先進的な取り組みで注目を集める道内有数の米どころの岩見沢ではこの秋、多くの作業が自動化された「ロボットコンバイン」を使ったコメ収穫が行われた。本年度は水田の水管理を自動で行う技術試験も市内でスタートし、省力化や高品質生産の実現に向けた次世代農業への挑戦が続く。（中沢弘一）

## コメ作り自動化中

さん(51)が笑った。

コンバインは本年度、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の実証事業としてAさんの農場に導入された。衛星利用測位システム（GPS）を搭載し、最初に手動であぜの近くを刈り取れば、誤差2〜3センチの位置情報で水田の形を認識し、残りの刈り取りルートをコンバイン自ら判断して正確に収穫する。設定した収量に達すると、運搬用トラックのある場所まで自動的に移動する。

Aさんは、ゆめぴりかやななつぼしなどを26畝に作付け。毎年1人で刈り取り作業を行い、最盛期は1日6〜7時間もコンバイン



(上)稲刈り作業中の「ロボットコンバイン」の運転席。倉田さんは操作のレバーに触れることなく、座ったままで9月17日、岩見沢市志文町（伊丹恒撮影）

## スマホに水温や水位

に乗っていたという。新しいコンバインの導入で「自分が別の作業をしている間も、刈り取りは経験の浅い人に任せることができる」と話す。

岩見沢市内では2013年に農業者らが「いわみざわ地域ICT農業利活用研究会」を設立。市、農協、北大などと連携し、自動操舵機能付きトラクターの導入、定点カメラを使った水田の生育状況の確認などスマート農業の普及に取り組んできた。

8月には鈴木直道知事が市内北村地区を訪れ、水田の自動水管理システムを視察した。センサーを使って測定した水温や水位をスマートフォンで確認し、水位

が下がれば自動的に必要な量が給水される。コメ農家にとって水管理は全体の労働時間の3割を占めるとされ、大幅な負担軽減になるという。同様の実証実験は空知管内新十津川町でも行われている。

全国的に農家戸数の減少に伴う農地の大規模化や高齢化、人手不足は加速している。いわみざわ地域ICT農業利活用研究会のB会長(51)はスマート農業について「10年後、20年後も地域に農地を残すための試み」と説明。普及が進むことで「この先も農業を頑張りたいと汗を流す人たちの思いを実現できる」と話す。

(左)ロボットコンバインによる作業を運転席からカメラで撮影する関係者。自動的に最適なルートを判断して刈り取りを行う。同



2019年10月05日(土) 夕刊 全道遅版 総合 1P (記事は再編集しています)

①「スマート農業」とはどのようなものですか、記事を参考に書きなさい。

②ロボットコンバインを使うとどのようなことができますか、記事を参考に書きなさい。